

1 ワイルドの紹介と理解

明治時代(1868年9月8日～1912年7月30日)の日本にどのようにオスカー・フィンガル・オフラティ・ウィルズ・ワイルド(Oscar Fingal O'Flaherite Wills Wilde, 1854-1900)が紹介されたのだろうか。ワイルド存命中にワイルド(ワイルドの作品)が日本に紹介されたのは、これまでの研究から3つあると言われている。明治16年(1883)3月の *The Japan Punch* の記事、明治24年(1891)5月の増田藤之助(1865-1942)による『社会主義下の人間の魂』(*The Soul of Man under Socialism*, 1891)の抄訳、明治25年(1892)10月の坪内逍遙(1859-1935)によるワイルドへの言及である。ここでは、*The Japan Punch* の記事と坪内逍遙によるワイルドへの言及を中心に取り上げる。

(1) *The Japan Punch*

The Japan Punch の記事については、まず *The Japan Punch* のことを捉えておきたい。*The Japan Punch* とはチャールズ・ワーグマン(Charles Wirgman, 1832-1891)が、文久2年(1862)に創刊し、明治20年(1887)3月まで続いた日本初の外字新聞である。特に横浜居留地の出来事や風俗をイラストで紹介した明治初期の記録としては、重要な資料として評価されている。

ワイルドは明治時代の日本にはちょうど同時代人であった。この時期にアメリカ講演をしていたワイルドの来日は実現しなかったが、明治16年(1883)3月の *The Japan Punch* 誌上にワイルドが日本へ行きたいという意向を漏らしたことが巡り巡って掲載された。“Oscar Wilde not having been able to come to Japan his envoy arrives instead.”というニュースとして伝わったのが、日本で最初のワイルド紹介となった。ワイルドは明治14年(1881)12月にアメリカ講演のためイギリスのリヴァプールよりニューヨークに向けて出発し、翌年1月にニューヨークに到着した。1月9日より講演会を始め、講演は延べ140回にも及んだ。ワイルドのアメリカ講演はまさに明治15年(1882)に行われたもので、この時のワイルドの意向が伝わったのである。

The Japan Punch 誌上におけるワイルド言及については、昭和9年(1934)1月の本間久雄「オスカア・ワイルドと日本」(『文学』第2巻第1号、岩波書店)で初めて取り上げられた。本間久雄には「オスカア・ワイルドと日本」と題する論文が2本あるが、『文学』(第2巻第1号、岩波書店、1934年1月)に収録されたものは、日本に於けるワイルド受容史の観点から、*The Japan Punch* や増田藤之助抄訳『社会主義下の人間の魂』について論じたものであるが、『芸術殿』(第4巻第3号、梓書房、1934年3月)に収録されたものは、浮世絵をはじめ、日本の芸術に対するワイルドの考え方等を論じたものである。昭和9年

5月に発表された『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)の「第6章 唯美主義と日本」の内容は後者のものである。

The Japan Punch によるワイルドの紹介は文学的なものではなく、ジャーナリズムによるものであったが、日本はワイルドをどのように受け入れ、理解したのだろうか。同じ *The Japan Punch* で紹介され、西欧文学の中で最もよく受容されているウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)と比較してみると、第1にワイルドの作品のジャンルが戯曲や詩だけではなく小説や評論など幅広いこと、第2に当時の日本にとってワイルドが同時代人であったことが大きな特徴であると言えよう。ワイルドが日本に紹介されたのは、講演というジャーナリズムに訴える活動が発端であった。ワイルドが「ラヴェンナ」を発表し、ニュー・ディグイト賞を受賞したのは明治11年(1878)で、オテル・ダルザスで息を引き取った明治33年(1900)11月30日のことであった。*The Japan Punch* によるワイルド紹介は、ワイルドのアメリカ講演旅行がひとつの契機になり、記事となったことは興味深いところである。

(2) 増田藤之助による抄訳『社会主義下の人間の魂』

増田藤之助による『社会主義下の人間の魂』の抄訳は、明治24年(1891)5月の『自由』に「美術の個人主義　ラスカル、ワイルド氏の論文抄譯」として掲載された。この増田の抄訳については「2　早すぎた翻訳」(次回掲載)で詳細に論じることにするが、『社会主義下の人間の魂』は同年2月の『フォートナイトリ・レビュー』(*Fortnightly Review* 49)に掲載されたもので、抄訳とは言えわずか3ヶ月後に日本に紹介されたのだ。

(3) 「シェークスピアの故國」

坪内逍遙によるワイルドの紹介については、明治25年(1892)10月の『早稲田文学』(第25号)の「シェークスピアの故國」の中で言及された。

其他バーリー(J.M.Barrie)ワイルド(Oscar Wilde)あり又ヘンリー、ジェイムスの如きも嘗て脚本を試みつることあり⁽¹⁾

との記述がある。ワイルドを劇作家として紹介ということになる。バーリーとはジェイムズ・マシュー・バリー(James Matthew Barrie, 1860-1937)のことで、『ピーター・パン』(1904)の作者である。バリーは明治21年(1888)に最初の小説『死んだがまし』(*Better Dead*)を発表し、その後『旧光派牧歌』(*Auld Licht Idylls*, 1888)、『独身時代』(*When a Man's Single*, 1888)、『エディンバラ十

一人男』(*An Edinburgh Eleven*, 1889)などを出版した。劇作家としてバリーは明治24年(1891)まで待たなければならない。バリーはウオットスン(Marriott Watson, 1863-1921)と合作で、四幕物の『リチャード・サヴィッジ』(*Richard Savage*)を書き、4月16日にクライティアリオン座で上演された。その後5月30日に『イブセンの幽霊』(*Ibsen's Ghost*)がトゥル座で上演され、明治25年(1892)2月25日に『ウォーカー、ロンドン』(*Walker, London*)がトゥル座で上演された。逍遙は明治24年(1891)4月から昭和25年(1892)2月の間に上演されたバリーの3つの戯曲から、このように紹介したことになる。

ワイルドについては、明治16年(1883)8月21日にニューヨークのユニオン・スクエア劇場で『ヴェラ』(*Vera; or the Nihilists*)が上演された。明治24年(1891)1月にニューヨークのブロードウェイ劇場で、『パデュア公爵夫人』(*The Duchess of Padua*)が『グイード・フェルランティ』(*Guido Ferranti*)という題名に変えて上演。(しかもワイルドの名前を出さずに)明治25年(1892)2月にセント・ジェームズ劇場で『ウィンダミア夫人の扇』(*Lady Windermere's Fan*)を上演した。『サロメ』(*Salome*)の初演は明治29年(1896)でパリ、イギリスで上演されたのは明治38年(1905)である。

ヘンリー・ジェームズ(Henry James, 1843-1916)はニューヨーク生まれであるが、明治9年(1876)にロンドンを永住の地と定め、1915年7月にイギリスに帰化した。ジェームズは明治7年(1874)に『ロデリック・ハドソン』(*Roderic Hudson*)、『アダム・モーヴ』(*Madame de Mauves*)を発表し、明治11年(1878)に『ディジー・ミラー』(*Daisy Miller*)、明治13年(1880)に『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*)を発表した。ジェームズの劇作の志向は明治14年(1881)にアメリカに帰った時にニューヨークの劇場から『ディジー・ミラー』の脚本をすすめられたことが契機となった。⁽²⁾しかし、『ディジー・ミラー』の脚本は舞台にのることはなかった。舞台で成功を収めたのは、明治9年(1876)に発表した『アメリカ人』(*The American*)が明治24年(1891)9月にロンドンで上演されたただけであった。

こうして時系列に整理してみると、逍遙は明治24年(1891)～明治25年(1892)にかけてイギリスの劇場で評判になったこの3人を取り上げたということになる。文章については無署名であるが、昭和61年(1986)5月の逍遙協会編『坪内逍遙事典』(平凡社)によれば、坪内逍遙の文章として紹介されている。

参考資料

本間久雄「オスカア・ワイルドと日本」(『文学』第2巻第1号、岩波書店、1934年1月)

- 平井博「日本における Oscar Wilde」(『福島大学学芸学部論集』第2分冊、第17号、福島大学学芸学部、1965年10月)
- 井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド 移入期(第1部)」(『鶴見女子大学紀要』第7号、鶴見女子大学、1969年12月)
- 平井博『オスカー・ワイルド考』(松柏社、1980年7月)
- 山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月
- 佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、武蔵野短期大学、1999年6月)

注

- (1) 「シェークスピアの故國」(『早稲田文学』第25号、東京専門学校、1892年10月)、p.5.
- (2) 谷口陸男「人と生涯」(谷口陸男編『ヘンリー・ジェイムズ』研究社出版、1980年7月)、p.24.